

ゴールドディング『自由落下』に見られる 寸断された時間

杉村泰教

ウィリアム・ゴールドディング (William Golding) の作品の中で、時間意識に強いこだわりを示しているのが『ピンチャー・マーティン』(*Pincher Martin*) と『自由落下』(*Free Fall*) である。『ピンチャー・マーティン』においては、主体の現時点の意識の大部分が過去の追憶の断片と非現実的な願望の断片に取って代られ、ごく稀に現在の自己の姿が垣間見られるような描写となっていた。『自由落下』では、現在の自己は『ピンチャー・マーティン』の場合ほど徹底して隠蔽されている訳ではないが、現時点における自己の姿の明確な把握をことさらに避けるところがある。即ち、今の時間が殆ど描かれず、過去の断片的時間と未来の断片的展望のみが主体の回復を求めて前面に押し出されている。過去の追憶と非現実的展望が現在の自己を押しつけて侵入し、寸断された時間が寸断された自己を無秩序に主張しているのである。確かにサミー (Sammy Mountjoy) の言うように、時間は生まれた時のしゃっくりから死ぬ時の喘ぎまでを煉瓦のように一列に並べたものではない。殊に記憶は、ある事件が他よりも重要であったり一つの事件が別の事件を喚起するような場合、時間の順序を崩すものである⁽¹⁾ だが、サミーの語る記憶がどれほど断片的なものであろうとも、それらを現時点で繋ぎとめることができれば自己の姿は今のような分裂状態にはないはずである。この意味で、『自由落下』のサミーは『ピンチャー・マーティン』のマーティン (Christopher

(1) William Golding, *Free Fall* (London: Faber and Faber, 1974) 6. 以下『自由落下』のテキストはすべてこの版により、引用文および言及のあとにページ数のみ記す。

Martin) 同様、終始、自己の姿が捉えられない状況にある。

以下に述べるのは、サミーの寸断された自己の存在が彼の寸断された時間に他ならず、この時間の断片を現時点の意識の中心に繋ぎとめることができなければ、自己の存在を取り戻すことは望めないという事実である。

I

自己像が捉えられない状況を、しばしばゴールディングは鏡像の乱れによって表現する。『蠅の王』(Lord of the Flies) では、少年たちが子持の雌豚を殺害した後、徐々に精神的退行状態に陥り、狩猟隊のリーダーのジャック (Jack Merridew) は、椰子の実の器に入った水に映し出された自らの異様な姿の中に自己像を認めることができない。同様に『ピンチャー・マーティン』においても、メアリー (Mary Lovell) への想いを遂げられないマーティンが、メアリーとナサニエル (Nathaniel Walterson) の愛の成就を目のあたりにして底知れぬ不安に襲われ、妄想によって作り上げた孤島の岩場の水溜まりに炸裂した自己の破片を見る⁽²⁾ 『自由落下』にも同じ描写がある。母親の存在の内部にすっかり包み込まれ自足していた幼児期を経て物心のつく年齢になっても、鏡は依然サミーの自己の姿を映し出すものではない。母親の鏡の中に映っていたものは、せいぜい風に吹かれている洗濯物や石鱸の泡、壁に付着したゴミや塵の模様なのであり、自己像は、母親と一体となつてその模様の中心にあいた一つの穴にすぎない。彼は、鏡像を十分認識することなく思春期を迎えるわけである。それ故、彼が安定した自己像を獲得するまでに乗り越えなければならない関門は、母親との一体化からの離脱であった。

事実、青年期に到るまでサミーは、男性よりもむしろ女性になるほうを望んでいたし、そうでなくても中性的であった。父親の顔も正体も知らずに育っ

(2) ゴールディングの作品の中で「鏡像」が重要な役割を果たしていることは、Philip Redpath も指摘している。Philip Redpath, *William Golding: A Structural Reading of his Fiction* (London: Vision, 1986) 142n 参照。

たサミーにとって、父親は“a speck shaped like a tadpole invisible to the naked eye”であり、頭も精神もなく誘導ミサイルのように特殊化されて魂を抜かれた存在にすぎない(14)。

ラカン(Jacques Lacan)は、幼児が鏡の中に自己の姿を捉え始める時期を「鏡像段階」(“the mirror stage, *le stade du miroir*”)と称し、幼児の中に象徴化活動が芽生える最も初期の段階として位置づける。生後6ヵ月から18ヵ月にわたるこの段階の終了時点は、来るべきエディプス期(“the Oedipus phase, *le stade de l'Edipe*”)の開始時点でもある⁽³⁾エディプス期は、父が幼児を母親から切り離す時期、即ち母親と子供の双方が共にそれまでの一体感から自己を離脱させるべき時期である。幼児と母親との一体化を禁ずることは、幼児にとって最初の「掟」となる⁽⁴⁾しかるに、父の立場、ラカンのいう「父の名」(“the Name-of-the-Father, *le Nom-du-Père*”)が疑問視されるならば、子供は母に縛られたままに留まるという。こうなると、子供は「鏡像段階」あるいはそれ以前の状態に留まり、象徴の世界へと脱出することができない⁽⁵⁾メラニー・クライン(Melanie Klein)によれば、子供と母親との一体化は必ずしも幸福に満ちたものとは限らない。子供は、母親の身体に対して極めて残忍な破壊衝動を感じ、母親の身体を切り刻む妄想に襲われたり、逆に母親が自分を破壊するといった被害妄想に苦しむ⁽⁶⁾特に、父親と結合した母親のイメージに接した子供は、母親がこのうえもなく残酷な攻撃者として映る⁽⁷⁾と同時に、男児の場合、母体を切り刻んで内部の父親の phallus を破壊する衝動に駆られ⁽⁸⁾ 女児の場合は父親の phallus を内包している母親に羨

(3) Jacques Lacan, *Écrits I*(Paris: Seuil, 1966) 89-97.

(4) Anika Lemaire, *Jacques Lacan*, trans. David Macey (London: Routledge & Kegan Paul, 1982) 85.

(5) Lemaire 235.

(6) Melanie Klein, *Love, Guilt and Reparation and Other Works 1921-1945* (London: Virago, 1991) 308-09.

(7) Klein 213.

(8) Klein 190.

望と憎悪を抱く。後者の場合、父の phallus を内包する母親と同一化しようとすることから母を破壊する衝動が生み出されるのである⁽⁹⁾

このように、自他の破壊衝動に左右される幼児が鏡の中に見るのは、自己の姿のまとまった全体ではなく「寸断された身体」(“fragmented body, *corps morcelé*”)である⁽¹⁰⁾。サミーは、このような破壊衝動を一度も母親に対して抱くことなく、ほぼ完全に母との一体感を満喫した状態で成長するが、グラマー・スクールに在学して以来、彼が熱烈に恋い焦がれた同級生で現在、師範学校に通うベアトリス (Beatrice Ifor) に接近するにつれて、彼女の中に既に他者が入りこんでいるかのような妄想にとりつかれ、訳もなく嫉妬に狂い、言いようのない不安感を募らせている。

... jealousy, final and complete of the people who might penetrate her goodwill, her mind, the secret treasures of her body, getting where I if I turned back could never hope to be — I began to scan the men on the pavement, these anonymities who were privileged to live in this land touched by the feet of Beatrice. Any one of them might be he, could be he, might be her landlady's husband or son; landlady's son!(80)

彼女は、ここでは父親と結びついた母親のイメージを纏ってサミーの前に現われている。母親に対しては感じたことのなかった被害妄想と破壊衝動が、ここに到って初めて彼を不安に陥れるのである。青年期のサミーの鏡像は、それゆえ「寸断された身体」に近いものがある。

(9) Klein 192-93.

(10) Lacan 93-94.

Self looking in the mirror. I saw myself as a very ugly creature. The face that looked at mine was always solemn and shadowed. The black hair, the wiry black eyebrows were not luxuriant but coarse. The features set themselves sternly as I strove to draw them and find out what I really was. The ears stood out, the forehead and the jaw receded. I felt myself to be anthropoid... (218-19)

母体離脱が必要以上に繰延べられ、結局ベアトリスとの一体感を強める結果となった訳である。ベアトリスへの大胆な問いかけ “What is it like to be you?” (103) と、それに続くサミーの一連の夢想から察するに、彼はベアトリスとの性的接触の願望というよりはむしろ、彼女の体内(胎内)に収まることを願っているような印象をうける。“What is it like in the bath and the lavatory and walking the pavement with shorter steps and high heels; ...” (104) それも、常に既に他者がその優先権を握っているという妄想に苛まれながらである。それは、彼女の下宿先の主人やその息子に始まり、共産党(Y. C.L)の同志ロバート・エルソップ (Robert Alsopp), 少年時代の悪友フィリップ (Philip) といった、およそベアトリスとは無縁な人物、その他、彼女と交際しているかも知れない不特定多数の男性、果ては彼女の信仰や彼女に触れる空気にまで嫉妬するという事実に見われている。サミーは、彼女の胎内を既に占領していると思いついでいる無数の他者によって極度の不安に怯えると同時に自己の欲望を極度に刺激され、その唐突な欲情に辟易して拒絶の態度をとる彼女に殺意さえ抱く。“If you don't marry me I shall —” “I shall kill you” (106). このようにベアトリスに対するサミーの欲望は必ず他者を媒介とするものであり、他者に触発されたものとなっている点に注目する必要がある。さらに、彼の破壊衝動が、既にベアトリスの胎内を占領しているかも知れない他者を、母体を切り刻むことによって破壊し尽くそうとする意識に基づいている点も見逃すことはできない。ベアトリスの “frigid-

ity”を指摘する批評家もあるが⁽¹¹⁾、仮に彼女が“frigid”だとすれば、それは、サミーの欲情がこのような母体破壊衝動と表裏一体であることに対する彼女の無言の自己防衛と考えるべきではなかろうか。そもそも、彼女とサミーの出会いから性や結婚の問題に辿り着くまでの過程が極めて不自然である。彼女の肖像画を描く以外、共通の話題も趣味も社交の場も持たず、共有する時間と空間の大部分がその場しのぎのものとなっている。師範学校の下校時をにらんで自転車で駆けつけ、さも偶然の出会いであるかのようにとり繕ったり、限られた時間に限られた場所で慌ただしく、おざなりな言葉を交わしたり、二人の間に未だ満足な会話さえ成り立っていない状態で、軽率にも、特別な関係を迫る手紙を書き送ったりする始末である。それも、前の晩、彼女が一人でダンスパーティーを楽しんできたことに嫉妬してのことなのだ。

ルネ・ジラルド (René Girard) は、人間の模倣欲望、即ち、他者の欲望を模倣する性質が、あらゆる差異や個性を消滅させ、共通の欲望の対象をめぐる闘争を内包した非個性的暴力集団を形成するという⁽¹²⁾サミーは、ベアトリスを欲望していると彼が仮想する無数のライバルとの競合の中で、神経をすり減らせていると考えられる。ジラルドによれば、共通の対象を欲望して互いに競合する集団は、その中のいずれかのメンバーを生贄に仕立てあげ、それを捌け口として集団内の有り余る暴力を排出し儀式的に浄化することにより、一時的に個性と秩序を取り戻す⁽¹³⁾最初、生贄に選ばれるメンバーが、何

(11) 例えば、ベアトリスに関する次のような見解は、彼女の生まれ育った環境の影響だけを指摘しているにすぎない。Bernard F. Dick, *William Golding* (Boston: Twayne, 1987) 58: “When he discovers she is frigid, he abandons her.” V.V. Subbarao, *William Golding: A Study* (New Delhi: Sterling, 1987) 61: “Her devotion to custom and precedent renders her impotent.” Mark Kinkead-Weekes and Ian Gregor, *William Golding: A Critical Study* (London: Faber and Faber, 1985) 175: “... the unawakened, socially and sexually inhibited girl.”

(12) René Girard, *The Scapegoat*, trans. Yvonne Freccero (Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1989) 138.

(13) René Girard, *Violence and the Sacred*, trans. Patrick Gregory (Baltimore:

らかの点で他とは異なった優先的な印を持つものであるとすれば、⁽¹⁴⁾それはベアトリスの胎内を既に優先的に占領しているもの、いわば「父」に当たるものである。母体を切り刻み、その内部の「父」を殺すことによってサミーは模倣を脱した個性と精神の安定を得ようとする。

だが、既に述べたように、メラニー・クラインは、母体を切り刻もうとする子供が逆に母親によって身体を切り刻まれる恐怖に怯えることを指摘している。更に、クラインによれば、その子供は、それと同時に、父親によって自分の phallus を切断される恐怖にもおののくという⁽¹⁵⁾このように生贄に加えた暴力が供犠を行なう主体(集団)の側に跳ね返ってくる状況をジラルは「供犠の危機」(“sacrificial crisis”)という⁽¹⁶⁾最初、生贄に捌け口を求めた暴力が、主体の中に逆流し浸透し拡大して、主体を次第に破壊する方向へ導くに到ったとき、供犠は危機に瀕する。ほぼ同じ主旨のことをサミーはグラマー・スクールを卒業する日、校長から忠告されている。

“If you want something enough, you can always get it provided you are willing to make the appropriate sacrifice. Something, anything. But what you get is never quite what you thought; and sooner or later the sacrifice is always regretted.” (235)

鉛筆デッサンと情交により、ベアトリスの身体を切り刻んだ後でサミーが味わうのは、常に、自己そのものの身体を寸断され去勢される苦痛であった。

“I could not accompany her. My instrument was flat” (118). “Those fantasies of adolescence now brought to half realization on my side were

The Johns Hopkins UP, 1989) 8.

(14) *The Scapgoat* 18-19.

(15) Klein 190.

(16) *Violence and the Sacred* 49.

sad, dreary and angry. They reinforced the reality of physical life and they destroyed the possibility of anything else; and they made physical life not only three times real but contemptible. And under everything else, deep, was an anguish of helplessness and loss” (123). このようなサミーを、一段高い所から悲哀と同情のこもった目で見つめる暖かく謎のようなベアトリスは、「父」と結びついた「母」のイメージとして描かれている。“I had my warm, inscrutable Beatrice, triumphed in a sort of sorrow and pity; ...” (118)

一方、スケープゴートとしてのベアトリスを示唆する表現も頻出している。“She remained the victim on the rack, even a rack of some enjoyment” (118-19). “Her contribution, after the heroic sacrifice, was negative. Death of a maidenhead pays for all” (119) 彼女は次第にサミーに隷属する存在となり、「犬のような目」で彼を見つめ (121), 「鳶」となって彼に纏わりつく (122)。彼女の身体を描いた(切り刻んだ)サミーの優れた絵画は、まるで祭壇に供えられ祝福をうけた生贄の如く、窓から射し込む光で黄金色に輝き、それが彼女の全身にちりばめられる (124)。

彼は、犠牲者を神聖化するこの儀式的光景の中で、自分の暴力そのものも浄化されるのを味わっている。このことによって彼は当座、自分の罪から解放され、心の平安を得るのである。だが、すべての問題は、ここから生ずることに当時のサミーは甚だ無頓着であった。

II

ベアトリスを祭壇に供えたサミーは、彼女から姿をくらまし、共産党の集会で偶然出会った活動仲間の一人、タフィー (Taffy) と瞬間的に恋に落ちる。既に、そこには、ベアトリスに対して感じたような「他者の介在」はない。それは、ベアトリスとともに葬り去られたはずである。しかるに、スケープゴートとしての彼女のイメージは、車にはねられた瀕死の猫が殺してくれと悲鳴をあげる姿に、あるいは、夢の中の彼女が洪水に足をとられ泣き叫びな

がらサミーの後を追ってくる姿に現われる。彼女の顔からは、あの絵の中のような光は失せ、肌のしみ、目の隈がそれにとって代わる。サミーの加えた暴力は浄化されてはいなかったのである。このことは、彼が少年時代、教会堂の祭壇を唾で汚した事件と無関係ではない。だが、彼はベアトリスとの件を“the skeleton in the cupboard”(128)として、事実から目をそらせ、タフィーとの生活に突き進む。

幼年時代から、概ね、時の流れに従って書き進められてきたサミーの自伝が、ここに到って突然、時間の秩序を失い断片的になる。戦火による世界の無秩序は、サミーの心の無秩序でもあった。“I welcomed the destruction that war entails, the deaths and terror. Let the world fall. There was anarchy in the mind where I lived and anarchy in the world at large, two states so similar that the one might have produced the other” (131-32). 場面は、大尉となったサミーがゲシュタポに捕われて、ハルデ博士 (Dr. Halde) の尋問に応ずることができず暗闇に隔離されるところから、不意に少年時代に戻る。フィリップにそそのかされて、教会堂の祭壇に唾を吐きかける現場を聖堂番に見つかり、こっぴどく耳を殴打され入院するはめになる。彼の入院中に母が急死し、たちまちにして孤児となったサミーは、結局、その教会堂の牧師ウオッツ・ウオット (Father Watts-Watt) に引き取られる。幼い頃、一人夜中に目を覚ました時の闇も恐ろしかったが、隣接したバーに行けば、そこはいつも光に満たされ、大勢の客と、彼らを接待する母の姿があった。牧師にあてがわれた寝室は、およそ光というものから隔絶された闇、眠る時間になると電球を取り去られる闇である。だが、母の胎内ほど快適ではなかったにせよ、たっぷりと湯をはった浴槽につかることができたし、寝室の闇の中で「胎児のような姿をとって」 (“taking up a foetal shape” [156]) ふとんにもぐりこんでいることで辛うじて恐怖を凌ぐことができた。母を失ったとは云え、当時の彼は母の胎内にすっかり充足していたわけである。場面は再びハルデの仕掛けた闇の罠に戻る。ここには、もはや母体の柔らかさも暖かさもなく、支離滅裂な形がつぎつぎに暗闇の中に浮かび上がり原始

的な混沌状態を呈している。身体は「凍てついた胎児」(“frozen foetus” [175])のように萎えきっている。身体を切り刻む妄想がサミーの脳裏を駆けめぐる。闇に閉ざされた部屋の中央に落ちている濡れ雑巾に手が触れた時のサミーの一連の反応は、ことごとく自分の身体を損傷させるものと関連づけられている。蛇、酸、アルカリ、そして最後に、それは切断された phallus となる。サミーの妄想によれば、天井に肉片が付着しているのは、それが世界の全重量をかけて少しずつ下がり、彼以前にそこに閉じ込められていた人間を押し潰し切り刻み破壊し尽くしたからであり、その残骸の一部が、床に転がっている切断された phallus なのである。かつて、彼がベアトリスに加えた暴力が、限りなく拡大された形で跳ね返り、「母」なるものが彼の身体を、「父」なるものが彼の phallus を、今、将に寸断しようとしている。単なる掃除道具入れにすぎない小部屋の暗闇の中で、サミーは自己の存在の根本問題に係わる体験を経たわけである。だが、彼はそのことに気付いていない。収容所長によって闇から解放された時、まるで全てが許されたかのように、外の景色の一切が清浄な大気と澄明な光に満ちあふれて見えたり、宝石と音楽に囲まれて聖霊降臨の如き奇蹟が訪れるのを実感したりする。しかし、その同じ眼が彼の内面に向けられた時、そこに展開されるのは美ではなく恐怖であった。

この拭いきれない闇と恐怖の原因がつきとめられないまま、場面は突然途切れて、郷里のグラマー・スクールの学校生活の断片が映し出される。収容所から牧師の住居、再び収容所、更にグラマー・スクールへと場面は過去の時間の中を行きつ戻りつする。しかしながら、それを語る主体の現時点における存在には殆ど言及されることがない。それは、限りなく非存在に近い存在である。この小説の冒頭から読み取れるのは、かなりの成功を収めた画家で生活も安定しているが、常に非合理的なものに身を引き裂かれ自責の念に苛まれて、当てもない来世を空しく渴望する宗教的アマチュアの姿である。“Yet I am a burning amateur, torn by the irrational and incoherent, violently searching and self-condemned”(5).

語る主体は依然として寸断された状態に在り、断片的過去と断片的未来が

現在を押しつけて次々に侵入している。仮に現在の自己が在るとすれば、それは断片的過去と断片的未来との雑多な混合物以外の何物でもない。寸断された自己は即ち寸断された時間なのである。何度となく繰返される“Here?”という、サミーの内面から迸り出るような切実な問いかけは、寸断された自己とベアトリスとの因果関係がつきとめられるまで続く。

III

グラマー・スクールでの生活の回想の中で、二人の教師ロウィーナ・プリングル(Rowena Pringle)とニック・シェイルズ(Nick Shales)が、とりわけ詳しく言及されているのは、彼らが、サミーの鏡像(自己像)の確立を異常に長びかせ、そのことがベアトリスとの関係に決定的影響を及ぼしたからである。「母」から自己を離脱させるべき「父の名」が、サミーに欠けているのは、実父の不在に加えて、母親の連れ合いだったと思われる得体の知れない病弱な下宿人や、同性愛的奇癖のある養父ウオッツ・ウオット牧師の故である。グラマー・スクールで、その教育的情熱と温厚な人柄の故にサミーが最も信頼した化学の教師ニックは、彼にとって最初の「父の名」となるはずであった。一方、ウオッツ・ウオット牧師との恋に破れ、失意のうちに年を重ねる宗教の教師ロウィーナは、或いは彼女の養子となっていたかも知れないサミーに、ことの外、辛く当たった。彼女の教育に窺えるのは、聖書の、詩や文学としての価値を無視して、専ら教義や規律を盾にとり、とりわけ女性がphallusを内包する側面を、おぞましいものとして徹底的に抑圧する傾向である。しかし、彼女は、この側面を排除することによって、ますますそれに捉えられ脅かされる。サミーが下書き用のワークブックに何気なく描いた丘陵地帯と木々のスケッチを、彼女はわざわざ倒立させて強いて猥雑な絵に見立て、怒りと断罪をこめた口調でクラス全員に説教し、さらにその絵を校長のところに持参する。“I had a little garden, children, full of lovely flowers. I was glad to work in my little garden because the flowers were so gay and lovely. But I did not know that there were weeds and slugs and

snails and hideous slimy, crawling things ——'”(206)

『蠅の王』の中の狩猟隊のリーダー、ジャックは元々、徹底して規律を強いる聖歌隊のリーダーでもあった。しかし、規律を強ければ強いるほど、彼は逆に無秩序そのものに魅せられてゆく。狩猟隊に再編成された聖歌隊のメンバーは、子持の雌豚の放逸な姿を抹殺しようとして、却ってそれに魂を奪いとられる。『ピンチャー・マーティン』においては、ナサニエルの phallus を内包するメアリーの存在に、マーティンは殺意を感じると同時に悩殺されている。『尖塔』(*The Spire*)のジョスリン(Jocelin)の場合も、最愛の信徒グッディ(Goody Pangall)が棟梁大工のロジャー(Roger Mason)と不義を犯したことによって引き起こされたグッディへの憎悪と欲情が、次第に彼の精神と肉体の両面を蝕んでゆく。同様にサミーにおいても、ベアトリスが他者の phallus を内包しているという先入観から生じた彼の破壊衝動には、逆に彼自身が魅了され解体されてゆくような感覚が含まれている。

化学の教師ニックの科学的合理主義では、この種の感覚を理解することはできない。思春期のサミーが勇を鼓して「性」にまつわる悩みの相談をもちかけた時のニックの対応ほど、サミーの期待を裏切るものはなかった。普段の穏やかな相貌を不意に硬化させ厳しくサミーの口を封じると、彼はこう断言する。“‘I don't believe in anything but what I can touch and see and weigh and measure. But if the Devil had invented man he couldn't have played him a dirtier, wickeder, a more shameful trick than when he gave him sex!’”(231) 彼は、科学の整然たる記号によって「汚れ」を除去しようとするのである。ニックが、サミーに対して責任をとらなければならないとすれば、それは、「父の名」において彼がロウィーナやサミーの不条理な魂を理解し、それを調和と統合に導く能力に欠けていたということである。事実、ロウィーナとニックは終始、互いに黙殺しあっている。

ラカンが、「父の名」が機能する条件として、父の言葉が母によって承認されるべきことを強調する。母が父の立場を認めなければ、子供はいつまでも

母に縛られた状態を続けるという⁽¹⁷⁾サミーの「母」は、実母からロウィーナへと推移するが、両者とも「父の名」を承認せず、サミーの母体離脱を妨げる。

ジュリア・クリステヴァ (Julia Kristeva) によれば、生殖の営みに伴う「汚れ」 (“the abjection”) は、母なるものの権限の下にあり魅惑的であるとともに恐怖をも与えるものであるという⁽¹⁸⁾それは、「父の名」によって導かれるはずの「記号象徴秩序」 (“the symbolic”) から排除された「原記号欲動」 (“the semiotic”) である⁽¹⁹⁾この原記号欲動、即ち母親の権力は、父権制とその宗教によって記号象徴秩序の側から禁止を被る。その典型的なものが旧約聖書であり、そこにおいて原記号欲動を排除する論理は他のいかなる宗教よりも厳しさを示す⁽²⁰⁾ロウィーナの厳格さも、ここに由来する。宗教儀礼は、自己の存在が母の中へ取り込まれて出られなくなる恐怖を拭い去るためのものである⁽²¹⁾サミーがベアトリスを祭壇に供えたのも、このためである。記号象徴秩序は、原記号欲動を抑圧するのではなく止揚させることによって象徴機能を果たすことができる。「父の名」によって記号象徴と原記号欲動との二つの領域を分かち「定立性」 (“thethetic”) が獲得されるが、原記号欲動は、常に、この定立性を壊そうとする。「父の名」は、定立性をその都度、再生産して、原記号欲動を止揚するための新たな記号象徴を作り出す。定立性は、それ故、柔軟性が必要とされる⁽²²⁾

しかし、ひとたび、この定立性が硬化し、その暴力性を科学や宗教の中に巧みに覆い隠した支配機構としてコード化された場合、原記号欲動は記号象

(17) Lemaire 83.

(18) Julia Kristeva, *Powers of Horror: An Essay on Abjection*, trans. Leon S. Roudiez (New York: Columbia UP, 1982) 54.

(19) *Powers of Horror* 65.

(20) *Powers of Horror* 90-112.

(21) *Powers of Horror* 64.

(22) Julia Kristeva, *Revolution in Poetic Language*, trans. Margaret Waller (New York: Columbia UP, 1984) 46-51.

徴秩序を直撃し解体しようとする⁽²³⁾

宇宙の事象をすべて「記号」で片付けてゆくニックの科学的合理主義も、ロウイーナの強調する宗教的儀礼も、ともにこのような「コード化」に他ならない。「コード化」に対する「汚れ」(原記号欲動)の反逆は、ジラルルのいう「供犠の危機」の中にも窺える。それはまた、母によって認められない「父の名」は「掟」としての価値を持たず、子供は象徴界に参加することができない、というラカンの説とも一致する。サミーの鏡像が寸断され回復不能に陥ったのは、ニックとロウイーナとが共通して持っている「コード」によってベアトリスを支配したからである。サミーが暴力的になればなる程、ベアトリスの反撃の力も、それに応じて強まってゆく。こうした状況を、サミーは、彼女と出会って間もない頃から既にはっきりと感じていた。“Most terribly and exactly I felt that to kill her would only increase her power” (224-25)。これは、『ピンチャー・マーティン』の、マーティンのメアリーに対する感情と同種のものである。“I can't even kill her because that would be her final victory over me”⁽²⁴⁾クリストファー・マーティンの存在は“Christopher and Hadley and Martin were separate fragments”⁽²⁵⁾の如く、サミーの存在は“torn by the irrational and incoherent”の如く、ともに「寸断された身体」の状況に陥っている。過去の回想が、因果関係の脈絡を欠いた断片的な意識の寄せ集めになっている点も両者に共通している。両者ともに、現時点の自己の存在を取り戻すことができないのは、過去の出来事が彼らの意識に残した一つ一つの痕跡と現時点の自己との間の因果関係を理解することができないか、あるいは理解しようとしていないからである。

過去の諸々の痕跡が脈絡を取り戻して今の時点とつながりを持てば、「寸断された身体」を修復して現時点の自己の存在を取り戻すことができる。なぜ

(23) *Revolution in Poetic Language* 83.

(24) William Golding, *Pincher Martin* (London: Faber and Faber, 1969) 103.

(25) *Pincher Martin* 161.

なら現時点における自己の存在は、過去の無数の痕跡を一つ一つ結びつけ未来へと向かう時間の流れの中に、その都度、位置しているからである。エドムント・フッサール (Edmund Husserl) の言うように、今の印象には「過去把持」(*Retention*) の尾と「未来把持」(*Protention*) の地平とが結合している⁽²⁶⁾この糸が切れた時、現時点における自己の存在は消失し、散乱した過去の痕跡の断片のみが残ることになる。これが寸断された意識であり、寸断された時間であり、寸断された自己である。

IV

時間の破片は、サミーのグラマー・スクール卒業当日の場面から、ベアトリスが収容されていると聞かされた精神病棟を訪問する場面へと、歳月を越えて乱れ飛ぶ。ベアトリスと最後に別れた日に遡り、砕け散った過去の破片を拾いあげて現時点に繋ぎとめ、時間の流れを取り戻す必要性は、サミー自身が痛切に感じていることなのである。しかし、サミーとベアトリスとの因果関係は、彼女に再会するまでは、あまりにも複雑な過去の夾雑物によって未だ遮断されている。

There should be deliberate thinking back, a straightening out of the time stream back to when you last saw her. Yet the spots are opening and closing in front of my eyes... and that complex sticks a peninsula into this ocean of cause and effect that is Beatrice and me.
(240)

廃人同然のベアトリスは、サミーと目を合わせると、ぎくしゃくと身体を回し彼に背を向ける。看護婦が諫めて無理に正面を向かせると、ベアトリス

(26) エドムント・フッサール『内的時間意識の現象学』立松弘孝訳 (東京：みすず書房, 1980) 155 参照。

はゆっくりと立ち上がり、サミーの足元に放尿する。“Beatrice pissed over her skirt and her legs and her shoes and my shoes. The pool splashed and spread” (243). これが「コード化」を粉砕する原記号欲動の反逆であり「供犠の危機」なのである。気を失いながら、サミーは改めて自己の身体が引き裂かれるのを実感する。寸断された自己とベアトリスとの因果関係は、ここにつきとめられたのである。それは、停滞した時間の流れを取り戻す第一歩でもあった。

だが、依然としてサミーがこの一步を踏み出せない状態にあるのはなぜであろうか。なぜ彼の内的時間は今だに停滞しているのであろうか。それは、ベアトリスと出会う以前のサミー、ロウイーナとニックに代表されるグラマー・スクールの教育を受けた頃から、少年期、さらに母親と一体となっていた時期のサミーにまで遡って過去の痕跡を拾い集め、現時点との脈絡を取り戻す努力を怠っているからである。ベアトリスは、謂わば、それらの痕跡をつないだ線の延長線上の一点にすぎない。彼の時間の遡行領域は、せいぜいロウイーナとニックの感化をうけたあたりまでの範囲に留まっている。記号象徴と原記号欲動とを分かち「定立性」を作り出すべき父親像(「父の名」)が、生まれ落ちてから一貫してサミーに欠落しているところへ、二人の教師が「硬直した定立性」を作りあげる教育を行なったことが問題なのである。二人の教師の教育が、ともに暴力を覆い隠した支配機構の一部として機能する可能性のあることはサミーによっても指摘されているし、彼を幽閉したナチスこそ、そうした暴力が具体化されたものであることも彼は理解している。例えば彼はロウイーナの教える宗教を“... this mode which we must call the spirit... touches only the dark things, held prisoner, incommunicado, touches, judges, sentences and passes on” (253)、ニックの教える科学を“... the atom splits to order. All day long, year in, year out, the daylight explanation drives back the mystery and reveals a reality usable, understandable and detached” (252)と批判する。しかし、ロウイーナとニックという謂わば精神上的の両親の感化と、実の親の影響とを結びつける糸は、サミー

の意識のどこかで断ち切られているように思われる。彼が、諸々の過去の痕跡を現時点の意識の中心に繋ぎとめることができないのは、この断絶のためである。

現在の地平からロウィーナとニックの教育をふり返り、そこからはるか昔に遡って、ロットン・ロウ (Rotten Row) のスラムで母親と過ごした幼児期を回顧すれば、そこに首尾一貫した事実が浮かび上がってくるはずである。それは、記号象徴と原記号欲動とを分かち、後者を限りなく止揚させ得るに足る強靱かつ柔軟な「定立性」が獲得できていないという事実である。一言でいえば、満足のゆく「父の名」に巡り会えなかったということである。この一点を見据えることができれば、彼の切断された時間意識は修復され、再び流れを取り戻すであろう。未来に当てのなない神の啓示を期待し、過去の時間の断片にふり回されているサミーの現状を敢えて評すれば、過去把持と未来把持の、現時点への接合が外れ、意識の時間的流れが凝固している⁽²⁷⁾この時間の断片を、彼の現時点の意識の中心に「接合」することによって意識の時間的流れを取り戻さない限り、自己の現存在 (*Dasein*) を回復することはできない。そして、この断片的な世界、散乱した意識の「接合点」は、人がどれほど病んでいても、その人格構造の中に必ず存在する⁽²⁸⁾ という。言い換えれば、どれほど人格が窮地に陥ろうとも、現存在を回復する手立てはあるということになる。

「自由落下」 (“free fall”) なる用語が、パラシュートで制御する前の、引力による落下を意味するものであるならば、サミーのパラシュートが開く可能性は十分残されていると考えられる。

(27) L. ビンスワンガー『妄想』宮本忠雄・関 忠盛訳 (東京：みすず書房、1990) 65 参照。

(28) ミッシェル・フーコー『精神疾患と心理学』神谷美恵子訳 (東京：みすず書房、1993) 50 参照。